

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	亀岡 雅紀
学位	博士（学術）
学位記番号	新大院博（学）第103号
学位授与の日付	令和4年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	子どもの身体活動量向上を目的としたオンライン運動会による社会活動モデルの提案ー子どもの健康をデザインするアクター学習に着目してー
論文審査委員	主査 准教授 村山敏夫 副査 教授 小林日出至郎 副査 教授 牛山幸彦

博士論文の要旨

本論文は、幼児期から健康的な生活を送るための土台を構築するために、地域デザインの視点から子どもの身体活動量を高める社会活動モデルを提案するものである。具体的には、健康に繋がる要素として「身体活動量」、教育の要素として「保育施設や小学校などの教育機関」に注目し、ICTを活用した教育連携システム構築による地域デザインについての研究である。そのため、保育現場におけるアクター（担い手）を整理し、かつアクター学習の方法を検討することで、地域価値発現の効果を高めることを目指している。

本論文は、以下のとおり構成されている。

第I章では、序論として、地域デザイン学会が提唱したZTCAデザインモデルに基づき、Z・T・C・Aの4つの要素に触れている。「Z：ゾーンデザイン」はデザイン対象となる地域をゾーンとして区切り、「T：トポスデザイン」は創造された価値や物語をもとに地域をかけがえのない唯一無二の場に意味づけ、「C：コンステレーションデザイン」は境界内外に存在する物に刻まれた記憶などの個々の物語をつなぎ合わせることで新しい価値を創造し、「A：アクターズネットワークデザイン」は地域で関わる各アクター（担い手）を適切に連関付けすることと、アクターに適切な行為規範を提供することと解説している。これにより、地域デザインは新しい社会活動モデルを創出するための方法論として位置づけられ、地域で展開される社会活動がZTCAデザインに基づくことで新しい活動のモデル構築に繋がるものと論じている。

第II章では、文献研究として、以下の先行研究が整理されている。

・COVID-19による世界的な身体活動量の低下と身体活動量の向上に関連する我が国の取り組みについて現状を把握し、流行前に比べて流行後は全ての国の調査対象地域で身体活動量が低下

している。

・我が国の保育・教育現場の現状と ICT 化の視点から、世界が目指す SDGs 達成に向けて我が国が「Society5.0」の推進によって世界に先駆けた知識集約型価値創造システムの構築が進められており、いち早く ICT を活用した教育環境の整備が求められている。

・地域デザイン研究の現状の視点から、地域や現場の担い手となるアクターをどうデザインするかが重要であり、アクターはすべてを実際に創り出す人材資源となり、地域デザインにおいてはコンテキスト転換の担い手ともなる。そのために、地域デザインにおいてアクターの存在意義は大きい。

以上、文献に基づき整理されて本論文における研究の方向性と妥当性を示している。

第Ⅲ章では、以下の通り検討手順が示されている。

新型コロナウイルス感染拡大によって遠足や運動会などの行事が延期及び中止となった施設を対象に、幼児の身体活動量を高めるコンテンツ（オンライン運動会）を設定し、保護者や保育者、大学生を担い手とするアクター学習方法の導入による社会活動モデルを検討する。

第Ⅳ章と第Ⅴ章では、幼児の身体活動量を高めるコンテンツとしての社会活動モデルの結果として、以下のことが示されている。

・保育者においては、保育現場で課題となる「姿勢を維持し身体を支える力」や「運動を続ける能力」の指標となる測定項目（体支持持続時間）を取り入れて評価することを示した。

・保育者においては主観的評価の妥当性が低いことが考えられるため、実測値等の客観的評価で補うように促していくことがアクター学習に繋がる。また、保護者においては、各家庭で子どもを取り巻くすべての保護者がわが子に対する健康教育に関心を持つよう、父親と母親の両方に対して調査を実施した結果、父親と母親は共に主観的評価の妥当性が高いことを示した。

第Ⅵ章から第Ⅷ章では、アクター学習における保育現場での結果として、以下のことが示されている。

・新型コロナウイルス感染拡大による新しい生活様式への移行により生じた否定的コンテキストについて確認するとともに、保育・教育現場の現状を取り上げ、新たな社会活動モデル構築に向けた「オンライン運動会」が ICT 教育のコンテンツとしての可能性がある。

・新たな社会デザインモデルの一環とした ICT 教育の実施により、保育現場における否定的コンテキストから肯定的コンテキストへの転換を示した。さらに、オンラインを活用した ICT 教育により、いつでも手軽に保育施設間の交流ができるため、保育施設間の交流機会が増加する（保育施設間の関係が深化する）状況が生まれたことから、オンラインによるイベントは地域デザインの新たな可能性を持つコンテンツであることを示した。

以上の考察に基づき終章において、生涯健康な社会を構築するため、地域デザインの視点から子どもの身体活動量を高めることができるコンテンツを設定し、そのコンテンツを基にして地域デザインを利用した社会活動モデルを提案し、本論文で提案された地域デザインモデルの波及が、多くの人々が健康に暮らせる社会づくりの一助となると結論付けている。

審査結果の要旨

本論文は、生涯健康な社会を構築するために地域デザインの視点から子どもの身体活動量を高めることができるコンテンツを設定し、社会活動モデルを提案するものである。ICTを活用した教育が注目される中、オンライン運動会というコンテンツを利用した社会活動モデルを提案し、そのモデルには大学生という本来保育現場と関わるはずがない異質なアクターの存在が必要であることを明らかにしたことの視点は高く評価される。本論文で提案されたモデルの展開は、これまでに具体的な事例がなく、独自性の高い取り組みであることが認められる。

ここでは、オンライン活用によるICT教育としてのフィールド研究を重ねているが、モデルの一般化を進めるには更なる定量的データの収集が必要であり、その点からいえば、本論文が集積してきたデータは十分とは言い難いが、しかしながら、これまで事例の無い取り組みを具現化して仕組みを構築してきた点は、本論文の学術的価値を損なうものではない。

また、幼児期から健康な生活を送るための土台を構築するために、地域デザインの視点から子どもの身体活動量を高める社会活動モデルの提案を目的とし、具体的に健康に繋がる要素として「身体活動量」、教育の要素として「保育施設」や「小学校などの教育機関」に注目してオンラインによる教育連携システム構築による地域デザインについて論じたことは高い評価といえる。

さらに、健康教育の視点に加えて、我が国が進める「科学技術イノベーションによる地域社会課題解決（DESIGN-i）」の視点からも、地域課題解決に向かう学生を育成することにより、多くの人々が健康に暮らせる社会づくりの一助となることが期待できる。

なお、本論文は運動科学、測定評価学、発育発達学といった分野横断的な知見が必要となる研究であるため博士（学術）の学位がふさわしいと考えられる。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。